
asymmetry **あたしと高橋君と体育の時間**

犀華

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

asymmetry あたしと高橋君と体育の時間

【コード】

N3703Z

【作者名】

犀華

【あらすじ】

asymmetry あたしと高橋君(その2)

紅葉前線が順調に南下して、暦通りの冬らしさが到来しつつある
今日この頃。

ジャージのファスナーを目一杯上げて口元を覆い、猫のように背
を丸めて吹き付ける北風をやり過ごしていた時、見慣れた人が見慣
れない格好をして歩いてくるのが視界に入った。

「よっ」

「え」

大口を開けて間抜け面を晒したあたしを見て、その人は器用に左
眉だけくいと上げてみせた。それからもの凄く呆れたような声で言
う。

「…すげえデカイ口だな、オイ。気を付けろ、阿呆っばいぞ、お前」

「え、だって…」

「？何だよ」

「いや、え、何でこんな所にいるんですか」

「はあ？何でも何も、今日は男女合同だつて」

「しかも、何でそんな恰好してるんですか？」

「ああ？そんなつて、何だよ。普通だろうが」

「今は体育の時間ですよ？大好きな菓子パン買いに行く以外に労力なんて使いたくない高橋君のそれこそ大っ嫌いなマラソンですよ？！それがいかにも張り切つて参加しますみたいいきつちりジャージなんか着て！」

「…ほう？」

ピキツつと額に青筋が浮かぶ音が聞こえた気がした。

「いたいいたいいたい！」

続けざまビキビキと何かが軋む音。

痛いですアイアンクローは止めてください暴力反対！

「あつ、そつだ高橋君。丁度いいです、ストレッチ一緒にやりましよう」

顔を掴む大きな手をやっとの思いで除けながら言うと、高橋君は意表を突かれたというように言葉を失った後、大きな溜息を吐きながら頷いた。

「丁度、……まあいいけど。お前友達いないの？」

「あたしにだって友人の一人や二人いますよー。たまたま今日はいつも一緒の子がお休みなんです」

「休み…ああ、川上ね。また面白いとこ突いてくんな、お前は」

「何がですか？」

川上さんが何か面白いのだろうか？ただちょっと白金髪ギャル系メイクの隠れ腐女子なだけで、その他はいたって普通のいい子だと思っただけ。

「いや、うん、まあ、いいや」

「ぶっん？」

「それで川上の他にはいないのか？友達」

心底心配だという表情で問われた。少しショックだ。

何かまるで娘の交友関係を心配するお母さんみたい。今度から「お母さん」と呼んで良いですか。

「いますよ、勿論。隣のクラスに同中の子がいますし。高校から仲良くなつて今では親友と呼んでもいいんじゃないかって位の人もいます」

咄嗟にセンスの事が頭に浮かんでついつい強気発言。

親友はちよつと大きく出てしまったかも。ごめんなさい、調子に乗りました。でも本人いないからいいか。

「へえ、どんな奴なんだよ？」

「んー、そうですね…」

そう問いかけて、あたしはその人の『人となり』を思い浮かべる。

椅子に座ると引き摺ってしまふ長い白衣と、幸せそうにほわほわと緩んだ口元と少し垂れた目元。

授業中だけ掛けるらしい銀縁の眼鏡は、お昼ごはんを食べている時は白衣の胸ポケットにしまわれている。

「本人は常に本気らしいんですが割と気が多くて、些細な事で幸せを感じられる単純な人だけど、落ち込み易くて、思い込みが強く、ちよつと頭がゆるくて、でもあまり気を遣わなくていいのが一緒にいて楽で」

可愛らしい女子高生が好きで、お昼を食べながらよく彼女達を観察しては変態くさい台詞を吐いている。実際に自分から何か行動を起こす事がないから通報せずにいるけれど、やっぱり変態以外の何物でもない。

「お前…何気にひでえー事を平気で言うよな」

「どこがですか、ひどい言いがかりです。気遣いの人ですよ、あたしは」

「なあ…。お前に合わせられる人間って、相当貴重だと思うぞ」

ちよっぴりおどけて言ってみたら、真剣な顔して諭された。一応あたしでも傷つくのだ。

「お前って制服も着崩さないし、髪も染めてないし、三つ編みだし、辛うじて眼鏡はかけてねーけど、一見すると暗くて真面目で地味な奴なのに……」

「なんですか、あたし今喧嘩売られたんですか？即金で買いますよ」

しみじみと噛みしめるように言われたから、ムツと顔をしかめた。高橋君は一瞬きょとんと可愛らしい顔をしてから、次の瞬間にはお腹を抱えてゲラゲラ笑いだした。

「ほらな、俺に対して普通の女はそんな切り返ししねーだろ。敬語が癖だし、そこから昼寝しては平気で授業サボるし、変な女」

変人認定された。不可解極まりない。

さすがに温厚なあたしもちよっぴり腹が立ってむっつりと黙りこんだら、高橋君が焦ったように謝りだした。

彼より随分小さいあたしの顔を覗き込むように身を屈める様が少し可愛かったので、寛大な心で許してあげようと思う。

「でもまあ、完走目指してのんびり来いよ。お前とろそうだな」

「何ですか、その明らかかな上目線な物言いは。あたし意外とマラソン得意なんですよ。と言うか、道具使わない競技なら大体得意です！」

「……オイ、それ自慢するところか？道具使わないって、ようは走るしか能がないって言う」

「泳ぐのも得意です！」

「……ああ、そう」

「ちよっ……、信じてないですね、何ですかっ、その胡散臭いものを見るような眼差しはっ！良いですよ、勝負ですよ、負けた方が明日のお昼にコンビニのアップルパイ驕るんですからねっ」

「メロンパン」

「む」

「俺はメロンパン」

「いいですよ、高橋君が買ったらメロンパンご馳走しますよ。まああり得ませんけどねっ!」

「あれ、どうしたんですか、ご機嫌ですね。それに随分沢山アップルパイを持って」

「はい、四つもあるのでひとつセンセにもお裾分けです」

「それはそれは、ありがとうございます」

「いえいえ。勝因は男女の距離の違いなのです」

「はい?」

「ああ気分良い！悔しそうな顔が今でもまだ鮮明に思い出されますよ、センセ」

「……君は時々理解不能になりますね」

(後書き)

男女の体力差を考えれば当然走る距離も違うよねっという。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3703z/>

asymmetry あたしと高橋君と体育の時間

2011年12月14日22時53分発行